

いつもなら、シヨパンの命日の10月17日に行われる催しを知らせてくれるワルシヤワの知人が、思いがけない訃報を伝えてきた。9日、「灰とダイヤモンド」などで知られるポーランド映画の巨匠アンジェイ・ワイダが、ワルシヤワ市内の病院で90年と7カ月の人生を閉じたという。

にわかには信じられなかった。今年2月5日、私も会員になっていいる北海道ポーランド文化協会（会長・安藤厚北大名誉教授）が札幌市内で開催した『「灰とダイヤモンド」の成立と受容』と題する講演会で、講師の久山宏二さん（ポーランド広報文化センター）から、ワイダが近々新作を発表すると聞いていたからである。

久山さんはワイダの通訳や、一部のワイダ作品の日本語字幕の監修も務め、今年6月にポーランドのクラクフで開催された「ワイダの90年」という学会では「日本から見えたアンジェイ・ワイダ」と題して発表し、巨匠との再会も果たされた。それから4カ月後のワイダの訃報はあまりにも唐突で、健在ぶりを示すはずだった新作「残像（原題）」が遺作となったことに悲しみが募る。

1955年に「世代」でデビュー以来、ワイダが約60年間に世に送った30作余りの長編を、映画史に浮かぶ巨大な星座のように仰ぎ見れば、50年代の「世代」「地下水道」「灰とダイヤモンド」は不動の巨星群だ。この「抵抗3部作」は、第2次世界大戦中のドイツ占領下のポーランドで

アンジェイ・ワイダ監督を悼む 同時代を描き 物語慈しむ

抵抗運動に身を投じた群像を描く。悲哀と憤りを喚起する悲劇が、乾いた映像で描出される点に作風が極まる。

私には「地下水道」への特別な思いがある。89年、伝説化していたこの名画を北海道ポーランド文化協会が自主上映し、中島洋さん（札幌・シアターキノ代表）が司会、伊東孝之さん（早稲田大学政治経済学術院名誉教授、当時は北大スラブ研究センター教授）が作品解説を務めた。上映スタッフの豪華さを当時は認識していなかったが、この上映会に行ったのを機に私は同協会に入会した。思えば、この追悼文を書いていることさえ、あの日の「地下水道」に「水源」がある。

さらに、自主管理労組「連帯」の運動を描いた「鉄の男」（81年）、その前駆の「大理石の男」（77年）は、同時代の状況と切り結ぶ記念碑的作品。現代史の主題は、旧ソ連とポーランドの歴史的問題を

扱った「カティンの森」（2007年）で頂点に達する。

一方、祖国の文学作品に基づく「婚礼」（1973年）、「約束の土地」（75年）、「パン・タデウシユ物語」（99年）などの文芸作品にはポーランド文化の高雅な薫りと風格が漂う。ともすればワイダは20世紀史の証言者としてのみ見られがちだが、古典的な物語と詩を慈しむ柔らかなまなざしも持ち合わせていた。

第1次世界大戦後、ポーランドが独立を回復して8年後に生まれたワイダは、その後の苦難の歴史を生きながら、独立100年に当たる2018年を待たずに世を去った。日本公開が来年に予定されている遺作では、政治的抑圧に抗した前衛画家が主人公。その役を演じるボグスワフ・リンドは「パン・タデウシユ物語」でも好演した名優ゆえ、ワイダ最後のメッセージが託されているのかもしれない。

（北海道情報大教授）



在りし日のアンジェイ・ワイダ監督＝2013年（ロイター＝共同）